

ケース」といえる。よりの確にいうならば、この「三突出」の原則を擁護し販売するために、『阿Q正伝』はこのように骨ぬきにされてしまったのである。それというのも、『阿Q正伝』の中で阿Qは、唯一の主要人物であるが、正面人物とはいえないし、英雄的人物ではさらさらない。『阿Q正伝』は20年代に書かれ、当時の魯迅はまだマルクス主義者ではなかったが、しかし問題は、今日にあってもなお『阿Q正伝』が依然として最も広く流布している作品であり、階級闘争が存在し、搾取階級の影響が存在するかぎり、やはり依然として大きな現実的意味をもっているということである。「四人組」は「完璧な人物」を自任し、自

他ともに欺いた、欠点を禁忌した阿Q主義者であった。毛主席は自らの著作の中で「阿Q主義」に何度もふれているが、このことは『阿Q正伝』がもっている巨大な生命力を一番よく説明している。これは疑いもなく、「四人組」が陰謀文芸の理論的支柱としていた「三突出」にとって致命傷であった。魯迅は勤労人民を醜悪に描いたというのか？『阿Q正伝』を打倒するのか？「四人組」にはその志はあってもその力はなかった。最も妥当な方法が、換骨奪胎であり、これこそが石一歌の所業だったのである。〔『上海文芸』1977年10月創刊号〕

〔資料2〕

石一歌の「矛」と「盾」

金同国著 大石敏之訳

偉大な文学者、思想家であり革命家である魯迅はかつて次のように指摘した：ある種の人には「大きな旗をふりかざし、それを虎皮にしたてて自分を包みながら他人をおどかすのである」と。「四人組」は正に一貫してこのようであった。彼らが魯迅の名前を利用して人民をあざむき、その党を乗っ取り権力を奪おうとする反革命の陰謀に役立てることができると感じたとき、自分たちである著作グループをつくりあげて魯迅研究の仕事を独占し、いわゆる魯迅を研究し学習するといった文章を大いに書きたてた。この著作グループがよく使ったペンネームが「石一歌」である。つまり11人の兄弟という意味でもある。

石一歌は3、4年の間にいわゆる「魯迅に学ぶ」文章なるものを大量にでっちあげ、魯迅とその著作に対する歪曲・改竄をほしいままにして、きわめて緊密に「四人組」の反革命の陰謀活動に呼応した。そのため大いに「四人組」のおめがねになったのである。上海で文芸を牛耳っていた「四人組」のある腹心は石一歌の文章を称賛して「路線が正しく、やり方が着実である」と言った。石

一歌の「正しい」というのはどんな路線のことなのか。「四人組」のあの反革命修正主義の極右路線にほかならないのではないか。

「四人組」が崩壊して、広範な革命的大衆はちょうど「四人組」が石一歌を通して魯迅研究の領域で犯した罪状を批判し、流された害毒を清めようとしていた。ちょうどこの時、新聞紙上に『「四人組」が魯迅を歪曲したのは、党を乗っ取り権力を奪うためである』と題する「批判文」が出た。その文章は「四人組」を「批判」し、33字にものぼる長い題をつけた黒い文章の作者呉耕畔を「批判」しているが、「四人組」がはびこっていた時期に魯迅研究の領域での旗頭であった石一歌のことには一言も触れていない。まことに不可解なことだ。「四人組」の魯迅研究の領域における罪状を批判するというのに、どうして石一歌のことだけは触れようとしないのか。これでは「批判」というよりもむしろ罪を許してやっているようなものだ。さらに不思議なことに、この一面識もない人は、「批判」を続けていくうちに突然、自分たちが去年書いたある文章が「四人組」一味によっ

て「実状に即していない」と見なされ握りつぶされた、だからさながら「被害者」ということになるようだと表明している。同じこの「被害者」が文章の末尾になると急に今度は自己反省の言葉を持ち出して来て、自分たちは以前魯迅に関するいくつかの問題について新聞紙上で「歪曲して語り」「論じた」ことがあり、それを「深刻な教訓として受けとめており」、「非常な心の痛みを感じている」などと言っている。この一面識もない著者はいったい何者なのであろうか。これまでにこの人が何かの文章を発表したのを見かけたことはないのに、どうして急に公けに話したり、そうかと思うと自己反省したりしていろいろなポーズをとるのか？ちょっと調べればすぐにわかった。なんとこの人こそ「四人組」がはびこっていた時の石一歌だったのだ。これはしにせの使った新しい看板である。こんな新しい看板をかかげたのは、あるいはしにせの古い商売を再興するためかもしれない。だがもっと重要なことは、どうやら石一歌を守る盾の役割をはたしているらしいという点だ。結局のところ、石一歌が大衆の批判を防ぎ止めるための盾なのだ。／

盾があれば必ず矛がある。とすれば、石一歌の矛はいったいどこにあるのだろうか。ほかでもないその盾の背後にある。これからわれわれは石一歌の盾を引っぱがしてその背後の矛を見るとともに、子の矛を以って子の盾を攻めなばいかん、ということではないか。

この「批判文」の中で次のように述べられている：「1976年3月13日の『文匯報』に呉耕畔という署名入りの33字もの長い題をもった黒い文章『趙七爺の弁髪から阿Q小Dの小さな弁髪に思いをいたしあわせて党内の悔い改めようとしなない走資派の大きな弁髪を論ずる』（訳注：原題は《由趙七爺的辮子想到阿Q小D的小辮子兼論党内不肯改悔的走資派的大辮子》で33字からなる）が突然現われた。この黒い文章はほかでもなく、彼（張

春橋）とその上海における仲間の注意深い策動のもとででっちあげられたものであって」、「その目標はすべて中央と地方の大勢の指導的な同志たちに向けられている」、「このことは、党を乗っとり権力を奪おうとする野心を実現させるために、＜四人組＞とその仲間がどのように上下歩調を合わせ、はるか遠くにいて気脈を通じ合ったのかを物語っている」。

確かに、呉耕畔の黒い文章は「四人組」が「画策してでっちあげた」もので、「党を乗っ取り権力を奪う」ために、「上下歩調を合わせ、はるか遠くにいて気脈を通じ合った」ものである。だが、呉耕畔のその黒い文章が大量に出回ったわずか3日後、つまり3月16日、『文匯報』にまたしても呉耕畔と符節を合わせたような『魯迅に学んで、右からの巻き返しに痛撃を与えよう』と題する別の文章が現われた。この黒い文章には、呉耕畔のものとうり二つの文や用語がたくさんあるのに、どうしてそれをさけてふれないでおくのだろうか。なにをかくそう、その文章こそは石一歌自らが書いたものであり、つまりは現在のこの「批判書」が書いたものでもある。自分で自分を批判することは、立場を変えたいと思う人たちにとっては必要なことである。だが、石一歌はどうやら「変節者」になるのをいさぎよしとせず、初めから高い位置にいる「英雄的人物」になりたがったようだ。だから、自分の文章を呉耕畔の文章といっしょに並べて批判するのはメンツの上から具合が悪く、そこで、いっそ耳を掩って鈴を盗むといったふうにして自分をあざむき、そんなことはなかったようなふりをして、避けてふれないでおいた方がよいと考えたのだ。ふれないというなら勝手にさせるほかはないが、白地に黒く、というわけで、ぬぐい去ろうにもぬぐいきれるものではない。

石一歌の3月16日の黒い文章は、ほとんど名指しにせんばかりにある中央の指導的同志を攻撃している。その中で彼は憤怒して次のように書いて

いる「＜永遠に巻き返さない＞と言っているが、それはウソであり、……だから一たび時機がおとずれさえすれば、頭の上に巻き上げた＜本当にたくさん＞の弁髪をもとどおりにおろすのだ」、この人物はずるがしこい上に凶悪であり、革命勢力の勢いがいい時には、弁髪を頭の上に巻きあげておとなしいふりをしているが、一たん事あればすぐに弁髪をもとどおり垂らすのである」。

この二くぎりの黒い言葉は、呉耕畔のそれと異口同音であり、石一歌のこの黒い文章の大きな眼目である。彼は悪辣にも当時中央の仕事を主になってやっていた指導的同志を、魯迅の小説にでてくる例の封建勢力の残党である趙七爺になぞらえて攻撃を加えている。しかし石一歌は決してこれに満足せず、さらに歩を進めてこう言っている：「弁髪が原因となって巻き起こった今度の＜風波＞の＜風源＞はどこなのか。北京である。ほかでもないあの＜弁髪將軍＞を称する張勳のところである。」「あの復辟の＜風波＞は正に彼のその弁髪によって巻き起こされたものだ。」「彼らに対する唯一のやり方は立ちあがって闘うことである。闘うためには、矛先を復辟派のボス弁髪、総代にピッタリ向けなければならない、なぜなら彼が＜風源＞だからである。＜風源＞が解決されず、ボス弁髪が断ち切られなければ、阿Qや七斤などの労働人民は苦しみをなめなければならないことになる。」それでは石一歌におたずねするが、おまえさんたちがはじめの方ですではっきりとある中央の指導的同志を「趙七爺」になぞらえている以上は、この「風源」、「弁髪將軍」とか「ボス弁髪」、「総代」とかいったものはいったいだれのことをさすのか。まさか「弁髪將軍」と趙七爺とが同一人物だとはいえない？ おまえさんたちにあのように戯画化され侮蔑されて攻撃を加えられたあの中央の指導的同志が、弁髪を頭に巻き上げたかと思うと又うしろに垂らした趙七爺であると同時に又「ボス弁髪」「総代」でもあるなどとど

うしても言えない？ おまえさんたちの悪辣な下心ははっきりとしており、われわれがそれをあばくにも及ばない。そこでわれわれとしては、やはり、おまえさんたちが呉耕畔を「批判」した言葉をいくつか借りて「還りて其の人の身を治める」ことにしよう（訳注：これは朱子の「即以其人之道，還治其人之身」という言葉から出たもので、相手のやり方で相手を処理するという意味である）。

「これは、毛主席に従って各地を転戦し長い試練を経てきた大勢の一世代前のプロレタリア革命家を十把ひとからげに＜弁髪党＞と侮蔑し、毛主席の長い試練を経てきた親しい戦友でわれわれの敬愛する周総理を＜弁帥＞と侮蔑するもので、下心は極めて悪辣だ。」「＜四人組＞とその仲間には、一握りの彼らのような人類の風上にも置けないような者を持ち出して、傑出した共産主義の戦士である周総理に反対し、おおぜいの古参のプロレタリア革命家に反対することは、狂犬が太陽に向かってほえ、羽蟻が大木を揺すぶるのと同じで、身のほど知らずだということがはっきりわかっていた。そこでやむなく自分自身にマルクス主義の上着を着せるとともに、苦心惨憺して魯迅という旗印をかけた大衆をあざむくほかなかったのだ。この点において、彼らは全く意識的であった」。

われわれは呉耕畔を「批判」したこれらの言葉をそのまま石一歌にお返ししておたずねするが、適切でない字が一つでもあろうか。いささか十分でないのは、次のことを言っていない点である。それは、呉耕畔と石一歌がにくにくしげに「矛先をピッタリ向けなければならない」とした例の「ボス弁髪」、「総代」について、国民党の特務張春橋がはっきりと彼らに「あの廃せられた皇帝でなければならない」「古い制度全体であるべきだ」と「指示」した、ということである。それはつまり、われわれの偉大な指導者・教師毛主席を悪辣にも暗に攻撃したということでもあって、ただ、われわれの敬愛する周総理をひそかに攻撃したと

いうのにとどまらないのだ！

「四人組」は、中央と地方におおぜいの革命的な指導幹部を打倒するために、「老幹部＝民主派＝走資派」なる一つの公式を編み出した。石一歌は「四人組」にピッタリとくっついて、思う存分に魯迅を歪曲し、彼らのために大いに働いた。彼らはタイムリーに『魯迅に学んで、右からの巻き返しに痛撃を与えよう』という文章をでっちあげ、魯迅が異なる時期に異なる対象に向けて述べた言葉を断片的にあちこちから寄せ集め、「民主派」とか「同調者」とかをさかんに論じた。石一歌は言う：「ブルジョア民主派は＜一時的に道と同じくする連れ＞にすぎない。」「プロレタリア革命が進行する過程では、ブルジョア民主派がまぎれ込んで＜同調者＞になることもある。社会主義革命の段階になると、階級関係に変化がおこるが、彼らの頭の中には依然としてブルジョアジーの＜王国＞が存在しており、そこでプロレタリア階級のすべてのものと全く相入れず、いたる所で敵対するようになってしまう。」「革命が進行して行く中での＜同調者＞の＜離合変化＞は決して不思議なことではなく、階級闘争、路線闘争の必然的な法則である。目標が違い、道が異なるのであるから、＜変化＞がおきない方が不思議な事である。」ここにおいて、石一歌は完全に「四人組」の代弁者になり、古参のプロレタリア革命家を攻撃する用心棒になってしまった。彼らは本当に魯迅を研究し学んでいたのだろうか。いや、彼らは魯迅の本意をほしいままに歪曲して、無理やり魯迅が「四人組」の党を乗っ取り権力を奪おうとする反革命の陰謀に利用されるようにしたのだ。石一歌の、いわゆる「民主派」、「同調者」といった問題における反動的な言論については、われわれは多くを語る必要もないので、やはり、彼らが「四人組」の仲間を「批判」した言葉を借りて彼ら自身を批判させることにしよう。彼らは次のように言う：

「四人組」のある仲間が「別の人にたのんで＜魯

迅の「同調者」批判に関する語録をさがす＞の手伝ってもらおうとした。魯迅の語録をさがしてどうしようというのか？ なんのことはない、＜四人組＞が発明した例の＜老幹部＝民主派＝走資派＞なるいわゆる＜客観的な必然的法則＞に＜理論的根拠＞を提供しようとしたのである。」「マルクス主義を堅持している老幹部を＜同調者＞、＜走資派＞と中傷して、必ずこれを打倒し死に至らしめて溜飲を下げようとした。このことは、まさしく、＜四人組＞が下心をもって敵味方の関係を転倒させ、党を乗っ取り権力を奪おうと妄想した反革命の残忍な心をあばいている。」

ごらんになればわかるように、これらの言葉に、石一歌について適切でないことを言っている文句が一つでもあろうか。ただ一つちがうのは、「四人組」の仲間が「別の人にたのんで」魯迅の語録を「さがすの手伝ってもらおう」としたのなら、石一歌こそがまさしく唯唯諾諾として魯迅の語録をさがしたこの「別の人」であるということだ。

以上述べたように、石一歌の化身が「四人組」や呉耕畔のたぐいの尻を打った仕置き棒は、ことごとく石一歌自身の身にあてられるべきものである。だが、石一歌は自分自身の仕置き棒にはたえられないし、もちろん顔を赤らめることなどあろうはずはない。なぜなら「この点をわれわれは深刻な教訓として受けとめており」、「われわれも以前いくつかの文章で、趙七爺が＜弁髪を巻き上げた＞とか＜弁髪をもとどおりに垂らした＞とか言ったことについて歪曲して語ったことがあり」「＜同調者＞、＜民主派＞について議論したことがあって」、「非常な心の痛みを感じている」云云、であるからだ。「教訓」というよろいを着て、意識的な「心の痛み」を盾として、当然受けるべき仕置き棒を防ぎ止めるとは、石一歌は何と「聡明」なことであろう！ だが、石一歌は決して、仕置き棒をまぬかれたことで満足はしていない。その次には彼は「正面人物」の形象を凝らして、「四

人組」をあばき批判する戦場におどり出てきたではないか。彼は自分自身を今日の「英雄」に仕立て上げただけでなく、さらに、以前は「好漢」であったというふりまでしようとした。われわれはしばらく、彼がどのように自分の本来の面目を糊塗しようとしたかを見てみよう。彼はこのように書いている：「8月にわれわれは魯迅の徹底的な革命精神を論述した記念の文章を『学習と批判』のために書いたが、思いもかけないことに、＜四人組＞のある仲間がそれを読んだ後で続けざまにかぶりをふってこう言うのだ：＜この文章はオリンポス山のゼウスみたいで、高いことは高いが、ただ実状には即していない。＞と。言外に言わんとするところは、つまり「四人組」は石一歌の文章が気に入らなかったし、石一歌の方も「四人組」とピッタリくっついていなかったばかりか、むしろ「被害者」でさえあるのだ。／＼ということである。事実は本当にこのようなものであったのか。人々が思わずたずねたくなることであるが、おまえさんたちは毛主席の病が重かった8月に、「魯迅の徹底的な革命精神を論述した」文章を書いて、ほこ先を誰に向けたのか？「徹底」的に誰を革命しようとしたのか？思うに、「四人組」を革命しようというのではあるまい？おまえさんたちが76年3月から10月までにすでに発表した文章から見ると、おまえさんたちは一貫して「四人組」の指示どおりに動き回っており、ある時は魯迅精神を借用して「反復辟」をととなえ、ある時には「魯迅に学んで、右からの巻き返しに痛撃を与えよう」と言い、又ある時には「木食い虫を取り除こう」といった具合である。これらの文章においておまえさんたちは、桑を指して槐を罵るようなあてこすりを言って暗に周総理を攻撃し、名指しである中央の指導的同志を攻撃している。おまえさんたちはすさまじいけんまくで、おおぜいの中央と地方の指導的同志を打倒し「取り除こう」としたのであって、これは誰の目にも明らかなことであ

る。してみれば、8月におまえさんたちが誰を「徹底」的に革命しようとしたのかは明明白白なことではないのか？だからこそ、「四人組」がおまえさんたちの文章に与えた評価が「オリンポス山のゼウスみたいだ」ということになるのだ。ゼウスはギリシア諸神の中の最高神であって、おまえさんたちの文章はそれと肩を並べることができるというのであるから、それはつまり、例の文章は、反革命の調子がもう極限に達する程度にまで高まっているということである。おまえさんたちにこんな高い評価を与えるのは容易なことではなからう。いわゆる「高いことは高いが、ただ実状には即していない」というのは、つまり、おまえさんたちのオクターブが高くて「四人組」が当時公けにすることができた程度をこえてしまったということにはほかならない。おまえさんたちは鼻息があまりにも荒すぎたために、「四人組」の前へおどり出てしまったのだ。／＼これ以外に、別の解釈はありえまい？われわれが石一歌の3、4年来書いてきた文章をザッと一度読んでみると、石一歌が「四人組」の党を乗っ取り権力を奪おうとする陰謀に緊密に協力して、わが党と、われわれの敬愛する周総理やその他の中央の指導的同志とに向けた長い矛は一かかえもあるほどたくさんあって、党と人民に多大の借金をしたのだということに気がつく。借りがあれば返さなければならず、ふみ倒そうとしてもそうはいかないのである。今もし石一歌が進んで党と人民に向ってあやまりを認めそれを改め、ほこ先を転じて、功績を上げ、それで罪をつぐなおうとするのであれば、党と人民はこれを歓迎する。もし一たび身をひるがえすや、「英雄的人物」のよそおいを凝らして立ち現われ、世をあざむき大衆をだまし、新しいトレードマークを盾として過去のあのような黒い矛を掩いかくし、さらには、あたかもずっと「四人組」の「実状」には「即しておらず」今まで彼らに重んぜられたことはないかのごときあわれなふりをよそおうとするならば、それは許すことができないし又よい結果をもたらさしはしない。／＼

〔《上海文芸》1977年第2期〕